

『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』翻刻と解題： 『向陵集』との関連において（上）

進藤，康子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8960>

出版情報：文献探究. 43, pp.48-56, 2005-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』翻刻と解題

『向陵集』との関連において(上)

はつめい

福岡市立博物館には、野村望東尼資料が数多く保存されているが、それらは、福岡市歴史資料館の旧蔵書として、一括して収められたものである。「野村望東尼遺品図録」(旧福岡市歴史資料館)によると、書簡、詠草、短冊など六百三十七点もの貴重な望東尼資料群が保管されている。

このたび、その中でも望東尼の自筆和歌資料『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』(福岡市立博物館蔵)、『みのとしようまのとし』(同)に關しての調査を行なったのでその報告と、『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』の翻刻・解題を今回(上)に、『みのとしようまのとし』の翻刻・解題を次回(下)にと、二号に亙って紹介する。また、『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』は、以下、『歌集』と簡略に表示する。著者名に關して、野村もとが望東尼と称したのは彼女が出家した後のことであるが、便宜上、それ以前であっても望東尼と一貫して記しておく。

猶、本稿は、幕末期の地方歌人大隈言道研究の一環として、拙稿「言道の月次歌会「まとぬ」をめぐる」付翻刻九大本『仲秋卷一』(「香椎潟」第四十二号)の考察に続くものである。

進藤 康子

一 望東尼略歴

まず、本資料の著者望東尼についての略歴を簡単にここに記す。向陵院招月望東禅尼、本名は野村もと。文化三年(1806)九月六日、福岡藩士浦野勝幸の三女として、福岡城南の谷御厩後(うまやうしろ)に生まれる。慶応三年(1867)十一月六日没、六十一歳。

文政十二年、福岡藩士野村新三郎貞貴(貞能)の後妻となる。天保三年(1832)二十七歳の時、夫貞貴とともに、和歌を学ぶため言道の門に入る。当時、言道は地元福岡において藤田正兼と人気を二分するほどで、前原、田代、久留米、芦屋、飯塚などの地方からも敢えて教えを乞われ、多くは商人などの庶民階級から支持を得ていた。

望東尼は、弘化二年(1847)七月、家を長男貞則に譲り、平尾向陵の山荘に隠棲し、言道を招いてこの「向陵」において、あるいは言道の自宅「ささのや」(池萍堂)や、門人宅「馴花亭」(薬院小姓町の小兒科医八木宗山とその妻つる子宅)などにて、開催された歌会に度々参加した。

安政六年(1859)夫の死後明光寺で剃髪し、向陵院招月望東禅

尼と称す。文久元年（1861）十一月、『草径集』上梓を目的として既に大阪に滞在していた言道を慕って上阪する。その足で京洛を巡り勤皇派の志士達と交流を持つようになり、次第に彼らの思想に影響を受ける。長州高杉晋作ら勤皇の志士達を平尾向陵山荘に匿った罪で姫島に流されるも、晋作一派に助け出される。慶応三年、山口県防府市三田尻で病没。歌人望東尼の作品としては『向陵集』、『上京日記』、『夢かぞへ』、『ひめしまにき』などが有名である。（註一）

二 言道歌壇のまとゐ

師の言道は、天保三年あたりから門人の実作指導の歌会を本格的に開催し始めている。天保三年は、言道三十五歳。折しも福岡藩士野村貞實とその妻もとが、言道のもとに指導を仰がんと、夫婦で入門してきた時期であることは先に述べた。言道は弟子達に、『詞の八街』等を使って文法の講義をし、ある時は『源氏物語』の講釈をし、また和歌を添削し朱点を付していく。（註二）

嘉永年間に入ると、庶民の歌会指導者としての意識は更に高まる。そして、それは歌の例会においても、ますます頻繁に使われた「歌会」「歌合せ」「まとゐ」などと言う語に投影されていると思われる。その中でも特に多用された「まとゐ」には庶民の歌会といった言道の思い入れを感じる。たとえば、次の歌をみると、

いひづか八幡宮前

まとゐしてうた奉るさと人のさかゆくみちは神ぞしるらむ

野村貞則が一周忌のとぶらひにとて向陵にしてよめるうた：
きみまさばけふのまとゐのいづこにかうちかたらひてめてかあるらむ

は『庚戌集』（註三）からの選歌であるところから嘉永三年頃のもので、の歌は『辛亥集』（註四）からで、嘉永四年頃の作であると思われる。詞書の「いひづか八幡宮」や、「一周忌のとぶらひ」の仏前において、ゆかりの人々が集い「うた」を詠み合い、「うた」を奉り、そして、「うちかたらひて」「過す」「まとゐ」がここにある。

また『壬子集』（註五）嘉永五年頃の作では、次のような歌がある。

まとゐ

みや人はとののうちにやむれぬらんおのがまとゐはのにてなりけり

当時、言道は歌論『ひとりごち』や『こそぢのちり』において、都人達の歌で、形式ばった古典模倣の和歌を「木偶歌」と称して非難していた。この歌の場合も「との（殿）」と「の（野）」を、都人の環境と自分の環境とを重ね合わせ対比することにより、自分の立場を直視し、かつ、従来の和歌作りへの反骨精神を示した。所詮自分の歌の土壌は野のまとゐである事を。しかも、この身分で、この場所では自分は歌作りはできないのだと我が立場を十分に悟っていた。独自で野趣溢れる歌をつくりをしようとの意気込みが「おのがまとゐ」に凝縮されていると思われる。

また、「花陰のまとゐ」「花のまとゐ」「うちかたらふまとゐ」「友と

のまとぬ」「おもふどちとのまとぬ」と、心通い合う歌友や門下生達と頻察に、「おのが歌会」といったこちよいい思入れをもって実作指導の歌会「まとぬ」を催していく。

その「まとぬ」の状況を髣髴とさせる好例として、門下生側の立場から書かれた望東尼の本資料『歌集』や『みのとしつまとし』は、非常に興味深い資料であるといえる。

三 資料的意義について

更に、今回の望東尼資料調査で新たに判明したことは、『歌集』と『みのとしつまとし』が、『向陵集』の稿本の一部であろうと推定され、『向陵集』の成立過程に関しても、多くの示唆を得ることができると大変有効な資料であることがわかった。

『向陵集』を編成していく時に、『歌集』のような、稿本がいくつがあつて、それをそのまま入れ込む形で作られたのだろう。『歌集』と『みのとしつまとし』の歌の多くが、『向陵集』の歌とほとんど重なり、配列もほぼ移動することなく一致を見ることが出来る。『向陵集』約千九百余首に対して、『歌集』の歌数は三十七首と僅かであるが、また、『みのとしつまとし』は約三百六十五首と分量的には、やはりその一部分ではあるが、そこには、『向陵集』では記されなかった言道の歌会での言動をも『歌集』の詞書から読み取ることが出来る、ある部分では言道のまとぬ成立過程を補う箇所があつたり、逆に、『向陵集』から『歌集』の筆録年が推定できるなど、互いに補い合う資料であると言える。

今回は『歌集』に絞って、解説を進めて行く。望東尼は、今まで時

代を反映した政治色の濃い作品が特に取り上げられてきたが、本資料の『歌集』は、女流勤皇家としての望東尼ではなく、黒田藩士の妻として、一女流歌人として「もと」と呼ばれていた頃の資料であり、言道に入門して、ひたすら言道の歌風を追い続け、書体まで言道を真似し、その結果、言道の筆遣いをそっくり書き写すべく、歌づくりへの一途な情熱にあふれた頃のものである。

この詠草に登場する歌の作者は、言道を中心として、望東尼や、望東尼の夫で貞貴こと貞能や、言道の師二川相近門人で、盲目の伴諧の宗匠白水宇逸、など門下生や歌友の歌も載せられている。『向陵集』の編纂段階で削除せられたであろう言道とのやりとりも、『歌集』や、次回で述べる『みのとしつまとし』から元の形を知ることができる。

また、『向陵集』で加筆された場合も多々見受けられ、望東尼の編集方針や推敲の跡、そして、言道の歌の添削の跡なども含めて、詳しく述べる事が出来る。

たとえば、A『歌集』B『向陵集』の対応する箇所の一コマを例に見てみよう。(以下、便宜上、『歌集』をA、『向陵集』をBと表示する)

A『歌集』

「ことし正月つごもりに、さくのやにて月ごとにをしむまとぬを
はじめるに、よみいでたるうたどもを、よきもあしきもこのまきにか
なむとて

もこ

くれはつる春のはてにはあらねどもまつ一月ををしむけふかな

「おなじとし二月つこもり、 廬橋庵にておなじともどちとまとぬす
題 柳 つめのみ 垣間

「月ごにをしむまとぬをおのゝどちごとしはじめていつまでかせ
む

「またのとし、やよひつこもり、はるをゝしむとてたれかれいざなひ
てみのしまの川原にゆきたる時

B 『向陵集』

「嘉永四年はるのはじめ

正月つこもりに、さゝのやに行ける時、けふをはじめとして月ごに
をしむまとぬせむと翁のいはれければ、みなをかしてよふくるまで
まとぬをして

くればつるはるのはてにはあらねどもまつ一月をゝしむよはかな

「きねむらぎつこもり れいのまとぬをして

つきごにをしむまとぬをおのがどちごとしはじめていつまでかせ
る

右のA、Bに共通する歌「くればつる春のはてにはあらねどもまつ一
月をゝしむけふかな」(A・B)、「月ごにをしむまとぬをおのゝ」(が)
どちごとしはじめていつまでかせむ(する) (A・B)があるこの場

面に注目して具体的に見ていこうと思つ。

(A)では記載がなかった「嘉永四年はるのはじめ」(B)とい
う明確な年が加筆され、次に、「正月つこもり」(A・B)に「月ご
にをしむまとぬ」(A・B)を始めようとする場面では「さゝのやに
て月ごにをしむまとぬをはじめける」(A)の表現が「けふをはじ
めとして月ごにをしむまとぬをせむと翁のいはれければ」(B)と、
言道から提案があった事が窺えるようになっていて、微妙に趣が違っ
てくる。

また、「よみいでたるつたどもをよきもあしきもこのまきにかきな
む」(A)から、よい歌も出来の悪い歌もとりあえずそのまま記録した
望東尼の筆録態度がわかるが、推敲の段階を経て最終的に(B)では
その事項は削除されている。「二月つこもり」の歌会の情報も同様で、
(A)にて具体的に「廬橋庵にて」という会合の場所も、「題 柳 う
めのみ 垣間」から推定できる歌会の具体的な内容も、(B)ではオミ
ットされ、単に「れいのまとぬをして」とだけシンプルに記されてい
ることがわかる。

加えて、この場面で、言道の本格的な定期月次歌会「月ごにをし
むまとぬ」の開始の明確な提示があったという事実が確認でき、そし
て、「二月つこもり廬橋庵にて・まとぬす」(A)、「きさらぎつこもり
れいのまとぬをして」(B)と云う様に毎月引き続き行われ、「やよひ
つこもり、はるをゝしむとて」(A)と月次歌会を継続してゆく。これ
は、先に引いた での「まとぬ」が頻繁に催されている活気あふれ
る時期が嘉永三、四年頃である事も符合する。

歌会指導者として本格的に和歌を教え始めた天保三年ごろから数え
ると既に二十年近く経ち、この間の歌会の様子は、『大隈言道伝』(梅

野瀟雄著（註6）に「月々の歌会の催しありて、入選の歌を定め、天位入選の者には、翁自ら浄書せられたる歌巻を与えて賞とした」ことが記載されている。この「月々歌会の催し」こそ「つきごと」にをしむまどぬ」であつたと思われる。

月次歌会への情熱の象徴としての「まどぬ」。この言葉の持つ華やぎ、熱気、そして、今までの形式に囚われない新体の歌への探求心が、単なる「団欒」や「会合」に終わらない、歌会を加味した意の「まどぬ」を生み出していったのであろう。

ところで、参考までに、良寛の自選歌集である『布留散東』（註7）を見ると、「このそのゝやなぎのもとにまろぬしてあそぶはるひはたのしきをつめ」の歌がある。ここでは、「まどぬ」を「まろぬ」と表現している例を見出すことが出来る。

ところが言道歌壇の場合、この様に樹の周りに集い丸く座って歌を詠み合う会合を、「まどぬ」とは区別して、「もとぬ」と表現している。木のもとで、あるいは花のもとで、和氣譚々と歌を詠み、実作指導をする会合を「もとぬ」とした。特に、望東尼の使用頻度は高く、『向陵集』からも多くの用例を見ることが出来る。

平尾なる山の高嶺の松のもとぬしたるとき 言道翁、「煮る湯も松の音たてつなり」と書いて出だされれば
木のもと落ち葉かきよせ火をたけば

のごとく見ても、「もとぬ」は単なる「高嶺の松の」木の元に居ることだけでなく、言道門下の「歌の修練」の場であることがわかる。また、

花まだしきころ馴花亭にて、人々歌詠みける時、花下と言つこと桜のもとにして

ただひとへさくらを待ち得ておのがどち花のもとぬをけふはじむなり
山の庵のさくら盛りなりける時、かれこれもとぬしたりしに、酒の調度などを持てかよふを、人々、などさはいそがしう物するぞとて笑ひければ、詠みて出だしける

身じろぐも物つき老いを木のもとに行きかよはする庭ざくらかな

に於いても、やはり、この「もとぬ」は「花下」「桜のもと」「や花の」「木のもと」に於いて「人々歌詠みける時」や、歌を「詠みて出だしける」会合を「もとぬ」あるいは「花のもとぬ」と呼び、酒や料理などもその雰囲気に合わせて準備されている様子が伝わってくる。のどやかで、そして決して堅苦しくない、普段の生活の中にちよつとしたしつらいをして、日常的に歌を取り込んだ、そういう庶民の歌会の要素を多分に含みもっていると思われる。

神無月九日、庭の紅葉のさかりになりければ、ささのやの翁をはじめ、かれこれもとぬしてさまさまの歌詠みける中に
した葉よりまたうら葉より秋萩のころころのうす紅葉かな
あるじしてもみぢ見る日はよそになく田鶴がねさへぞおのがものなる

「ささのやの翁」言道をはじめとして、「かれこれもとぬしてさまさまの歌詠みける」からも、この「もとぬ」は「紅葉」した木々を鑑賞しながらの歌会であることがわかる。「この様に」「まどぬ」が内包する

ところの「もとの」の様子は言道門下の歌の修練の場であることがよみとれる。

ただ、「もとの」は、近世およびそれ以前の和歌資料の中にはほとんど見出せず、「もと」とは「基」「土台」「根源」「素因」「以前いた場所」と言ったような意で用いられるのみで、「歌会をする」例は、言道および言道門下生以外にはほとんど見出すことはない。

猶、詠草『みのとしうまのとし』に於ける、安政四年前後の「うたあはせ」での言道の批点批語の記録や、飯塚や田代などの地方教授所へ行つたままなかなか帰つて来ないことへの望東尼の嫉妬の文言、いよいよ言道が大坂へと出発する日、どこまでも見送る弟子達の不安げで名残惜しい状況の描写、言道の上坂以降、指導者不在となつた時期、門下生達だけで集う歌会の様子、またそれらの記述と、『向陵集』との関連、『向陵集』成立過程への詳しい考察は、紙幅の都合上、次回に譲ることとする。

四 翻刻

(一) 書誌

資料請求番号 064 福岡市博物館蔵野村望東尼遺品目録
書型 縦 十九、八糎、横 百八十八、五糎
巻冊 巻子 一卷一冊 写
外題 墨書外題「歌集 言道・望東・貞能・宇逸」

後人の後補

用紙 楮紙 白色

備考 『歌集』の歌稿の他に三種張り混ぜあり。

(二) 凡例

- 一、福岡市博物館蔵『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』を底本とした。
- 一、和歌に通し番号を付した。
- 一、原本の表記は、漢字仮名などできるだけ原文のままとしたが漢字の字体は一部現行字体によつた。
- 一、清濁を区別し、適宜句読点を補つた。

(三) 翻字

歌集 言道・望東・貞能・宇逸

ことし正月つこもりにさくのやにて月ごとをしむまとる
をはじめけるに
よみいでたるうたどもをよきもあしきもこのまきにかきな
むとて

もよじ

1 くれはつる春のはてにはあらねどもまつ一月をくしむけふかな
題しらす

さだよし

2 ひがしなるみかさの山の山のはににしいる日のかげのこるな
り
3 はるがすみかすまぬけふはわか杉の山もまぢかに見えわたるかな
な

この日まどろみて

4 おもふどちをしみあひしを我独正月のはてに一日ねにけり

このひ言道まさらのつたもありしかどわすれにけり

おなじとし二月つこもり廬橋庵にておなじともどちとま
とぬす

題 柳 つめのみ 垣間

言道

5 うちたるゝそなたのやどの青柳のいとひとすぢも垣はこえこで
6 花ちりて梢むなしきうめがえにいつ見えきぬるみかすなるらし
7 しのびつゝ見る垣間みをしりがほにこなたむかへる玉つばきか
な

さだよし

8 こぎいづる舟まねくてにさはるかないそべにたてるあをやぎの
いと

9 にはぎくらえだかはしたるうめのみはいといとけなくなりけ
るかな

10 たゞひとえかいまもりきてわがやどにさけるとなりの山ぶきの

はな

はたおるおとのとなりのかたにきこえけるに

11 さもあらぬ人ならめとも垣間より見まくのほしきはたのおとか
な

12 かめにさすやなぎのいとに引れきてまたこのやどにまとぬする
かな

13 花さかむ三月はあすになりぬれどけふの一日のをしまるゝ哉

もよじ

14 みのるともまた見えねどもうめのはなさきにしあとはしるき染
かな

15 いくたびかゆくさかへさにかいまより見いれてまちし花さきに
けり

16 きさらぎもけふくれぬるをさくらばなはるわかけにもさかぬに
はかな

17 月ごとにをしむまとぬをおのがどちとしはじめていつまでか
せむ

このひいとおそくとひきたりけるに、さだよし、もとこ、
まちわびてねたりけるに

みづいれにさくらのさえだをさせりけるを見て、ねたるま
くらもとにかいておきたる

言道

18 ねぶりたるまくらのもとにさくらばなともありがほに象めるえ
だかな

しばしありてねぎめて

もよじ

19 ゆめさめてみればさしてし花のみかまたれし人もきつゝむかへ
る

こゝをたちなむとて

言道

20 とひくべきゝみまちわびてまどろへばとくまくらべにきなるな
りけり

さだよし

30 またくれぬけふのひ乍さらばとてたてばかぎりのはるかどぞお
もふ

おなじとし、八月廿九日、いへにてよめる

このいほのあるじおそくかへりて

貞能

21 さく花をまちぬるひまに二月ののこりすくなくりにける哉
かへるかり

宇逸

31 あるはきえあるはながれていはまよりおちくるみづのあわのは
てなき

22 かりがねのかへるにつけて二月のくるゝそらこそいとゝをしけ
れ

またのとこのちよひつゝもり、はるをゝしむとてたれかれ

32 のきはなるつめのしづえきにいつまでかわすれおくらむもずの
早にえ

いざなひて

もと

みのしまの川原にゆきたる時

もと

33 ながれゆく水のきよさにちりうきてなみのこのはもつつくしき
かな

23 おくりこし春のゆくへは山ひとへあなたにみねのかすみ也けり

34 ほどもなき心すさびのやり水をあわたゞしくもたきといふなり

24 くれはつるはるのひかげの山端にいるはつるまでながめつる哉

言道

35 いつしかと秋の半もすきむらのこのまさびしきもずのこゑかな
36 かつちりてもろきまゆみぞなかくにさかりひさしきもみぢ
なりけり

25 ゆぶづくひ半のこりてにし山のはつかにのみもなれる春かな

樽

右のつた 題 あさ もず まゆみ 軒の玉水

26 よどみなきな川水のながれさへさびしくなりてくるゝはる哉

貞能

27 くれて行はるのひかげの入までもおもふ人どちみのしまのさと

28 いりはてゝそらにのこれる光さへくらくなりゆくはるの暮哉

29 いざとひてたちがてにする菫哉けふをかぎりのはるとおもへば

註

(1) 望東尼周辺に關しての近年の先行研究は、前田淑氏の『近世福岡地方女流

文芸集』(叢書房)、『江戸時代女流文芸史 地方を中心に』(笠間書店)、『日本女性史論集』(吉川弘文館)などがある。

- (2) 天保年間の言道歌会の様子を物語る資料としては『笠山集』があり、穴山健氏「翻刻『笠山集』」よって窺い知る事ができる。この集は、言道をはじめとして、もと、貞能、貞則(貞能の長男)佐伯常貞(佐伯家は享保頃創業した酒蔵家「富士家」で、言道のパトロンの人)、谷川幹辰(言道の歌友)、村山漢古(田代の心学者。『自覚談』の著者)など言道門下五十数名の、天保三年から天保九年頃までの歌会の歌がまとめられたもので、佐伯家や野村家、その他の門人宅、言道のささのや等で催された歌会を、常貞が筆録、編集したであろう資料で、初期の言道歌壇の様子を詳しく伝えている。

その中において、まとめの用例が次の様に現われて来る。

まとめ

93 さかづきのめぐるまにくまとあするひとまさくらのいろになりつゝ

白水宇ぬしがもとにして六月もちのひ五人の人して日にうた千首よ

みける時

178 いつもかくかたらひなれしともながらけふのまとめはめづらしきかな

これかれまとめをしていろいろの題を詠みける(320)

言道がもとにして七夕に人々まとめをして星のまつりしける時屏風の歌(371)

右の93番歌において、題のまとめは「歌会」「歌の例会」「歌の集い」の意。

「まとめする」はさかづきがめぐってくる間に「歌を詠む」意。また、178番歌は「まとめ」で一日に五人で千首詠んだ歌会の様子が看取できる。これは、言道が弟子達一人一人に「その場の状況をすぐさま歌に出来るよう修練させ、そのためには、毎日百首は詠むように」との課題を与えていたこと

によるものである。320番歌詞書の「まとめ」は「いろいろの題」でといふところから、そして371番歌の詞書では星の祭りの七夕歌会に探題で歌を出詠しているところから、これらの「まとめ」も弟子達の和歌訓練の場を想定できる。

- (3) 九州大学付属図書館蔵『大隈言道家集』所収。
(4) 九州大学付属図書館蔵『大隈言道家集』所収。
(5) 九州大学付属図書館蔵『大隈言道家集』所収。
(6) 『大隈言道とその歌』(佐木信綱編)所収。
(7) 日本古典文学大系『近世和歌集』所収『布留散東』の十五番歌。

【付記】

本稿の資料閲覧、および翻刻については、福岡市立博物館に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を表する次第である。

(しんとう) やすこ・九州大学大学院博士後期課程)